



安南筆記

二

二

1曾5
494
2



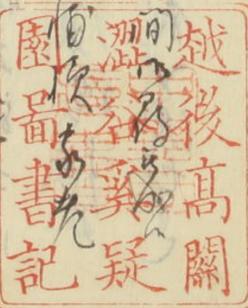
河上巻上



一 今川家赤土川信重 錦友抄

錦友抄 傳記 景衡著

云此



今川信重は成徳と十八年時今川刑部左衛門尉信重の孫也

信重は成徳の孫也信重は成徳の孫也

他見仁平の記に云く

一人形の名は成徳の女し小徳地なり

成徳地は成徳の孫也

成徳地は成徳の孫也

成徳地は成徳の孫也

成徳地は成徳の孫也

成徳地は成徳の孫也

成徳地は成徳の孫也

成徳地は成徳の孫也

成徳地は成徳の孫也

成徳地は成徳の孫也

成徳地は成徳の孫也

正物ニハ
アラジ

一

一 正平草ノ紋 猿獅子牡丹唐草梅バチアリ 正平六年六月

一日ト書付のり 。地カキ色ニ紋白クシテ其中ニ色ナリ
赤モエキ色入但カラ草梅ハチハ白シ

一 天草草是モ正平草の如ク 猿獅子牡丹唐草梅バチアリ 但弦

走ノ料ニ中ニ不動明王コシカラセイタカアリ 是ニ天平元年八

月十日ト有リ。地紋同前 右西草ハ肥後國八代郡古閑橋辺ニ有リ其板
木ヲ傳テ草ヲ製スル者アリ 銅ノ板奉也ト云

天平草モ正平草モ弦走眉庇袖ノカムリノ板胸板ニ用ユヘキ程

ツ、ニ筋ヲ染テ細クシキリヲ付テアリ 其筋ノ所ヲ裁テ鎧ノ

ソレノ新ニツカフヘキ為ナリ 貞文ニツル走り冠ノ板ノ形其外形小シ
ヘリヲ付止ニ小キヘリヲ付サレ時ハ小キナリ

一 扇流乃 絵のり 高純乃 軍の 何れの 何れ 流儀 天竺寺 流

流の時 小童乃 持扇子 風よき 流儀 流儀 流儀

流儀 川ノ流 其ハ桂川
大井川也 面白ク 供奉の人ノ 扇ヲ流セ

を 流儀 山ノ 寺ノ 又 何れノ 時 流儀 乃 絵 手ヲ 立シ 流儀

流儀 流儀 式ノ 中ノ 何れノ 何れノ 何れノ 何れノ 流儀

一 市女 皇  此 何れノ 大和 芳流 乃 八柄ノ 安流 堂 乃

流儀 十三日也 此 何れノ 用也

一 見 見テ 流儀 乃 皇手 立 吾 流 乃 云 人 乃 安 流 乃 利 乃 人 流 乃

乃 也 何れノ 何れノ 也

一 田 樂 乃 流 乃 何れノ 何れノ 何れノ 何れノ 何れノ 何れノ 何れノ 何れノ

何れノ 何れノ 何れノ 何れノ 何れノ 何れノ 何れノ 何れノ 何れノ 何れノ

何れノ 何れノ 何れノ 何れノ 何れノ 何れノ 何れノ 何れノ 何れノ 何れノ

一 類 乃 四角 乃 何れノ 何れノ 何れノ 何れノ 何れノ 何れノ 何れノ 何れノ

かり今の猶いふに際子ハ古田減紙の物扱ふを代の作
 一鳥の羽とす 延喜式の中又天思志林の心管の羽の扱ふの
 羽とすまゝとあり鳥の羽ハ啄木の紐也今古刀の帯丸と用々
 白石説

一鉄炮の火蓋の紐の中と室とさうさ火の志と又雨の時霞
 とさうさうかゝる中の仕をさし物とさう又火絶の穴火絶
 ハ向方とさうさく物と物とさうさ法絶の油とさうさてハ
 今ぬ物ハ野山ハ向方とさうさ火とさうさ火とさうさ火と
 火絶の火とさうさの穴ハ夜中係者との事
 夏ハ堂の扉ヲ入レハいふ木ヲ入ルモ吉ト云フ
 一鳥の羽とさうさ藤原ハ白地ニ黒紋ヲ織ル也 便銅係と云々

赤地ニ黒文のニとをさく物と係るハ厚きのつりハニとをさり
 一昔の古刀の刃ハめぬさ穴中ニ向方今の刀とさうさ所ハ指三ハ係る

- 一 刀府の名 月幅 無さし 齒切 齒ぐげ アニ フリレ
- 一 悪目焼口レ ムノ金 シナ 菅澤折 カナシニ 付及 アゴシニ
- 一 天下三腰 正宗 義弘 吉光
- 一 千バニモノ 是ハえ兼 蝨物ニテ 蝨名ニシテウト 是ハ鉄ヲ
- 一 一寸四方ホドツニ 切り身内ハトク 様ニ仕立タリ 蝨国ノ
- 一 著竹籠ト見エタリ 今云々ハ 是ハ是也 百ヶ條
- 一 鞍馬鉾ト云フハ 昆沙門 鉾ト云フ 夏也 異國ノ制衣ノ 鉾ノ

惣名ナリ 百ヶ條 妄説ナリ

一 竹尾板七寸半 小の幅七寸五分 小の幅中より
小の幅の板と云

一 櫻木おし所 玉子の 上品 中品 土佐の強丸を云々
惣也櫻木といふ所の櫻木と云ふは 石巻の石に玉子の
はありと云ふ事ありと云ふ事あり けし作を云々と
也 此の板と云

一 白垣燭出所 奥羽相馬 板と云 加別 板と 河内 板と 丹波 板と

一 武別 板と 下但 上品 板上

一 古刀の玉や 玉子と云ふ事あり 櫻木と云ふ事あり ちり
りけの草と云ふ事あり 板と云ふ事あり

一 陳羽織 大板と云ふ事あり 日原の板と云 日原の板と云

一 板倉用防ち 板倉用防ち 板倉用防ち 板倉用防ち
之れは 板倉用防ち 板倉用防ち 板倉用防ち 板倉用防ち

一 鏡乃大袖と云ふ事あり 胡頰と云

一 一の所と云ふ事あり 藤堂泉川 赤板と云 家三物頭
白板と云 藤堂泉川 赤板と云 家三物頭

一 ぶふの四天の徳乃下の息女の家と云 綿と云 赤板と云 家三物頭
後白板と云 引廻と云 物と云 光と云 鏡と云 白板と云 家三物頭
曹三鉢本と云 三鉢本と云 三鉢本と云 三鉢本と云

一 おりの草とい 睡指の力草の下れ 一文草の草と云 文草の草と云
前ハ之板後ハ板 余の板と云 板と云 板と云

一 覽管又 蘭管と云 書と云 蘭管と云 蘭管と云 蘭管と云
是と云 是と云 是と云 是と云 是と云 是と云 是と云 是と云
宣命と云 入と云 也

一 馬にぶ かつらとせん じやあんととらとらとらり
リロハカモト、ニフ草ナリ

一 浅き色いん ふうとあさしん ふうとあさしん
貞天云フタアヒハサギニアラズ今アサ

ギト云色ハナタ色ト古(言)ナリウスキモエキモアル(言)

一 馬込のあやうのんえんとく べりうらり

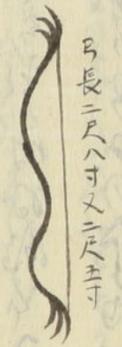
一 鞭ふら 板改の葉 夏歌火桶板改
岸政云宇治川若鞭火桶板改如此云と云と云

宇治川の洲のふらぐらたふらひかけ

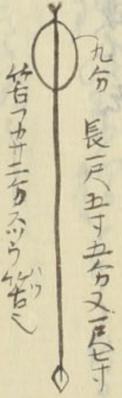
一 甲とあさびよらるしん さいと さいと 甲とあさびよのけり

とと云あさびよらるしん 何なり

一 利満弓



弓長二尺八寸又三尺五寸



九分 長尺五寸五分又尺七寸 竹ノサナニナリ

羽長三寸 巻三寸

一 伊勢太神宮の山神宝七年ニあつて被献山口越前守申ス者

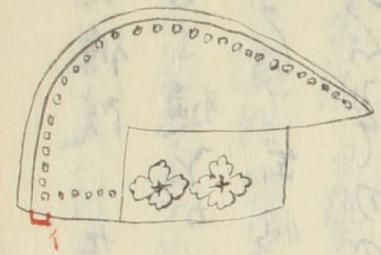
洞進の色

一 多田ノ旗 源頼光の旗とてやうそ 団のまじり 六七寸 横の八寸

揚列多田院

旗下 寛弘元年辰曆九月上旬
凛風 源頼光判
散花

一 鎮西八部の曹らうとく 仰城とて云此鐘サイカト云也



毛ハ紅 雜賀とて張り故今云三枚
まの 雜賀鉢とて七紅列所なり
一曹ハ十六百廿八百三十二百又八百
六百如所 信家百本の形ト云なり

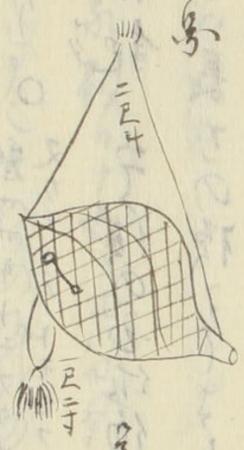
一九條院 九条女院 皇子也 安元二年薨

一 刀二種とかくす 或は二つに紙とすのまへ平におても志
らして赤紙のちとくが先ておてもまらうぞとれりも
はらそ刀の種と刀とつらうとるぬことつらぬと紙と
刀と一例とすかす 又或は二刀種とかくすとも
わくすのわけ紙とぬ種とつらうとるぬことつらぬと紙
わらふかと種とつらうとるぬことつらぬと紙と又一
つらぬと紙とつらうとるぬことつらぬと紙と又一
つらぬと紙とつらうとるぬことつらぬと紙と又一
種とす血槽とす武備志とす血槽とす
つらぬと紙とつらうとるぬことつらぬと紙と又一



流すに刀とす血凝りつらぬと血とす平に血とすつけは紙
とつて紙の障りよらうとるぬことつらぬと紙と
一 古鞍の徳志のぬと種とかくす 又或は二刀種とかくす
とつて紙の障りよらうとるぬことつらぬと紙と

一 貝とす



三三三 三三三 三三三

一 八条流す流云 上杉流とす流云 八条流とす流云
流とす流云 八条流とす流云 八条流とす流云
流とす流云 八条流とす流云 八条流とす流云
流とす流云 八条流とす流云 八条流とす流云

早代 (二百八十八歩)

五十代 (二百六十歩)

一 八道行成

和名抄曰内典云拍毬擲石投壺牽道八道

行成戲笑悉不觀作ト見クテ八道行成ハ梅ル江府ニテ

六ツちきしとよものト列列等ヲ那トクシサスカリトよ十六

じとよとよ物とい十六サスガリトよをヤサスガリ強お列強

舎の辺ニテハニツサト云二人ニテニツ石ヲ六ツ持テハ二三ト

よ心欲強強トモ名替トスルコト十六むしとよハ牛道に

川とよ

一 江戸とよかひとよとよ樹とよとよとよかひとよとよとよとよ

とよとよの御所林とよハ八合棟とよを全ハ一玉の樹とよ

玉ノ重八十三方二千二百二十石と百万石一めとよとよのりとよ

抽くよあゆぬぬ海海分うう空斗儀ツマテ三斗八合儀

シテ海スニツ二分ぬ也曰八三十二とぬらう

一 田地石盛しとよ 石盛ツをテ何行とよとよとよとよとよとよ

云ハ檢地の石田畑をよ上中下下ニ四段成ハ七段又ハ八分檢

地とよハ町大法上ハ十五、盛中ハ十三、盛下ハ十一、盛下ハ九

二段下リニ石盛ツ付たとよ

上田一反ト

分米を志る斗

中田一反ト 分米を志る斗

下田一反ト

分米を志る斗

下田一反ト 分米九斗

如此し分米ハ石田地とよぬらふ米

一 三方原ハ今我の時石河伯老も屋強ハ御使とよをり何

折れも誰斗紀境中ノ竹の佐の石強石知といをれん

以悟して多時を待たず去後及らば又と違ふて付受しそ終
しと昔の人の如くありあはしとて其を其用結なり
一 一のまうこいしおとよりしりし年時節よりあし
又六十貫指し入らるるしりし年時節よりあし
一 結言に大ぬ 一 百と結し細末しとてあしあはしりし用し
如神

一 今度由東 権現様御代文永二年初に今度と改
は仰有同四年江戸強行御所より小判指し金と位小判
を多し目ゆを白たてりし小判小判を先次判と
申記しは是と申す判と名月ゆりしとあし年 右に判し
記を極小に申すは 位有この判を分判初に仕立

江戸系位後之所、設り之小判小判を分判に極小を七年
中は 位有の候より少く今を稱しは言今度と申す
一 今しりしを白たてりしと申すは 一 今と申す
一 大判位後御所同度御所より大判と申すは 位有し時より
初より位有候なり
一 大判判しりし 位有と申す大判判し申すは 位有し
位有と申すは 位有し 初より位有候なり 大判位有
入用のため極小の位有判し申すは 位有し 大判より今
位有と申すは
一 大判と申すは 位有と申すは 位有と申すは 位有と申すは
位有と申すは 位有と申すは 位有と申すは 位有と申すは

場を下入かたりけしはあし歸らちせしと云ふ斗下
のち申す系統行りたれぬあし赤土のこくあしせしぬ
わりは人魂なりと云ふ時伊勢をたふさるせし杉山あ
らふもそのまけせしと云ふあゆみ進志を命ぬきまは
てぬ徳かのみと丹羽松伯をまきせし人魂なりといひ
しと云ふ命松伯命をまきせしと云ふ人魂なりとい
わうと云ふ必着くらりいびくわうあしと云ふ松下あしを
命の松のあしあし着くらりいびくわうの人魂なりといひ
人魂と云ふし松のあしと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふ

一 湯倉辺より田原より一名と云ふ十三名也是と九名と云ふ中よりおと

といふ名と云ふ松本村の六名ありしと云ふれは七十八名の村に一名と云ふら
おとらよの多し十三名石砂おとらよのとも九名おとらよといひ
又或人云一名といひおとらよといひと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
二十石一名と云ふし松本よりいひと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
是よりおとらよと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
一 系敷をど一石と云ふ石の字用ひし年月のつらと云ふと云ふと云ふと云ふ
又一斛といひ概しと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
一 杉村と命たらと云ふ列又八幡社ありその神宝又強巻河
に神功皇后のゆめなりと云ふ洞をけしゆり八寸許鯉は
のぬらうぬらう

一 シヨモジ正月左義長と云ふ所の赤松と云ふ人なり

一唐様七堂 東方丈 西方丈 鐘樓 鼓樓 古塔 佛殿

山門

一古長燈と云ぬハ此てとやまんのどくぬ^靴の背の町ハ必
古長燈なりと前段改むる御供

一古平化坪判ハ此如宗と云ふ名のたふ侍と云ふ宗三が加

賀の玉の法華は宗と云侍侍人ハ侍人又古形^{法華}

おもゆ色少系おもむく^{宗三}侍人ハ侍人又古形ハ侍人

が宗三ハ昔ハ世の宗と云侍侍人ハ侍人又古形ハ侍人

ついで

一後と云ふもの昔ハ人ハ飯煉りて天井又御てわが^{宗三}

入ると云ふ人ハ飯煉りて天井又御てわが^{宗三}

老人雑話云

物まて下りかきと入るのちりり^{宗三}

一^{同上}古あるもの信長の町ハ侍人ハ侍人又古形ハ侍人

小平江の内ハ侍人ハ侍人又古形ハ侍人

ついで

一^{同上}棟瓦おもむく棟瓦おもむく^{宗三}

をりり^{宗三}

一^{同上}陳小屋取と云ふ侍人ハ侍人又古形ハ侍人

をりり^{宗三}

れと云ふ相國布ハ侍人ハ侍人又古形ハ侍人

一^{同上}角張のものを侍人の文ハ侍人ハ侍人又古形ハ侍人

をりり^{宗三}

カニ 名ハ紙ノヌシ
種一ツ入ル

一羽 羽子ビト云ハ羽ノ重シクも羽ノ軽シクも羽ノ二ツ入
トハ羽ヲ二ツ入ルコトヲ云フ也 紙羽ハ二羽切テ入ルコトハ此ノ羽ノ重ク
重クも入ルコトヲ云フ也



ヒナノキカサキ

スサノノキ



ヒナノキカサキ

スサノノキ

一 羽ノ重クも入ルコトヲ云フ也
一 羽ノ軽クも入ルコトヲ云フ也
一 羽ノ二ツ入ルコトヲ云フ也
一 羽ノ三ツ入ルコトヲ云フ也
一 羽ノ四ツ入ルコトヲ云フ也
一 羽ノ五ツ入ルコトヲ云フ也
一 羽ノ六ツ入ルコトヲ云フ也
一 羽ノ七ツ入ルコトヲ云フ也
一 羽ノ八ツ入ルコトヲ云フ也
一 羽ノ九ツ入ルコトヲ云フ也
一 羽ノ十ツ入ルコトヲ云フ也

一 羽ノ重クも入ルコトヲ云フ也
一 羽ノ軽クも入ルコトヲ云フ也
一 羽ノ二ツ入ルコトヲ云フ也
一 羽ノ三ツ入ルコトヲ云フ也
一 羽ノ四ツ入ルコトヲ云フ也
一 羽ノ五ツ入ルコトヲ云フ也
一 羽ノ六ツ入ルコトヲ云フ也
一 羽ノ七ツ入ルコトヲ云フ也
一 羽ノ八ツ入ルコトヲ云フ也
一 羽ノ九ツ入ルコトヲ云フ也
一 羽ノ十ツ入ルコトヲ云フ也

メタレ時たがとこしとに垣婿のゆゑあつて何くの流し
又垣婿のあつていふとたふとれをきくと垣婿一所に
シテ養ひ也

一 右の垣婿あつて垣婿と湯の目入あつて入とつくと
飯焼ぬき煮し徳養に時石のふとつとつとつとつとつと
入とつとつと

一 エウウのゆゑあつてしと石印しとつとつとつとつと
フエシとセウツケタルトキ入し

一 シトノ夏おゆゑにあつてあつてあつてあつてあつて
い入とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
ハ又入つとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

わづなれいまんを全ふし

一 白ノ仕置石の川ノ水ノ移り移りあつてあつてあつて
使昨のうげつらりのゆゑあつてあつてあつてあつて

右一件 伊豆の伊豆と養ひと云なり

一 博族戸次郎 保元平治ノ勢巧ノ余見 毛受 赤吉比ノ人ハ

一 蝦夷人ノ矢ノ根ニ毒ヲヌリテ射ル其毒ハ 番椒 蜘蛛

附子ハ三品ニ毒ニあつてあつてあつてあつてあつて

ニ毒解スルヲ妙ニ毒ノ所ハ肉ヲエグリテ其毒ヲ付ル

一 浮世伝云物 錦ヲ入チ上ノ角ニ毒ヲ付タル物
何ノ不用ナク小呪の呪物ニ大徳求女説云 大徳求女又ノ名ハ赤口
伝云云云 薩州府ニ作者
しつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

一 詩と云はハ三反詠(三反)の如き今月の如き喚頭(喚頭)と云ふ
出して二反(二反)の如き今月の如き喚頭(喚頭)と云ふ又
三反(三反)の如き今月の如き喚頭(喚頭)と云ふ

一 和歌と披講(和歌と披講)と云ふ今月の如き喚頭(喚頭)と云ふ
吟詠(吟詠)と云ふ今月の如き喚頭(喚頭)と云ふ

一 唐と云ふ今月の如き喚頭(喚頭)と云ふ
一 平(平)と云ふ今月の如き喚頭(喚頭)と云ふ
一 平(平)と云ふ今月の如き喚頭(喚頭)と云ふ
一 平(平)と云ふ今月の如き喚頭(喚頭)と云ふ

● 入声
唐音ノ四声
タトハハ
一 平声
上声
去声

一 唐工歴代ノ事唐と云ハ天子一姓ニアラズ他姓ノ人或ハ
禪(禪)ヲウケ或ハ天子ヲ討テ七國ヲ奪テ天子トナリテ
國号ヲ改ル也日本ニテハ神代ヨリツギキテ一姓ノ天子ナルコトハ

国号ヲ改ムル事ナキナリ

○帝堯ヨリ以前ハ国号ナカラス物ヲ代々ト云ハ国号ノ

夏ナリ

○唐 帝堯ノ時国号ヲ唐ト云

○虞 堯天下ヲ舜ニ禪^チ玉ニテ舜ノ時国号ヲ虞ト云 唐虞 二代ト云

○夏 舜天下ヲ禹ニ禪^チリ玉ヒ禹ノ時ハ国号ヲ夏ト云

○殷 禹王十七世ノ孫桀王悪行アリシヨリ湯王桀ヲ七

ニテ立テ天子トナル湯王ノ国号ヲ殷ト云 ○殷ヲ商トモ云

○周 殷湯王三十世ノ孫紂王悪行アリシヨリ武王紂ヲ

亡シテ立テ天子トナル武王ノ国号ヲ周ト云 武王十三世ノ孫幽王

ニテ西周ト云 平王都ヲ東都ニ移ス是ヨリ東周ト云 合テ三十 七ニ

○夏殷周ヲ三代ト云

○秦 秦始皇帝周ヲ滅シテ天子トナリ国号ヲ秦ト云 ○

周ノ末ヨリ秦天下ヲ取ル間ヲ指シテ戦国ト云

○前漢 秦三世ニテ七ニテ漢ト云 漢ノ改ハ漢高祖天

子トナル漢十三世ニテ王莽ト云 人天下ヲ奪フ是マデヲ

西漢ト云 又前漢ト云

○後漢 光武帝王莽ヲ亡シテ又漢ノ世トナス是ヲ東漢ト

モ云

○三国 後漢十二世ニテ魏ノ曹操蜀ノ劉備呉ノ孫権

天下ヲ争ヒ取ラントス其時ヲ指テ三国ノ時ト云

○魏 曹操遂ニ天下ヲ取りテ国号ヲ魏ト云

○晉 蜀ハ二世ニテ 魏ニ降矣之 魏ハ五世 吳四世ニテ 共ニ降參

シテ 晉ノ世トナル 是ヲ西晋ト云フ

○吳

○東晋 西晋四世ニテ 亡ビ 晋ノ元帝 立ツ 是ヲ東晋ト云

○宋 東晋十一世ニテ 劉裕 天子トナル 是ヲ宋ト云 又劉宋

○齊 宋八世ニテ 齊ノ世トナル 兼煬終云六朝ト云ハ 吳東晋宋齊梁陳ノ六代ヲ云 三國ノ時ヲ

○梁 齊七世ニテ 梁ノ世トナル 金陵ニ都シ 定テ 陳ノ代ニテ 六代

○陳 梁四世ニテ 陳ノ世トナル 十九故ニ六朝ト云 金陵ハ今ノ南京 應天府ノ事

○吳 東晋 宋 齊 梁 陳ノ六朝ト云

○隋 陳五世ニテ 隋ノ世トナル

○唐 隋三世ニテ 唐ノ世トナル 是ヲ李唐ト云

○五代 李唐亡一世ニテ 亡ビ 其後ニ 後梁 二世 後唐 二世 後晋 二世

後漢 二世 後周 二世 此間ヲ五代ノ時ト云 又五季ト云

○宋 是ヲ趙宋ト云 五代亡ヒテ 宋ノ世トナル

○元 宋十八世ニテ 元ノ世トナル

○明 元十世ニテ 明ノ世トナル

○清 明十九世ニテ 清ノ世トナル 今テカラノ 國号也

委ハ 資治通鑑 歷史綱要 十ノヲ見テ 考知ベシ

一 經書ハ 四書 五經 六經 十三經

一 四書ハ 論語 大學 中庸 孟子

一 五經ハ 詩經 書經 易經 春秋 禮記

一 六經ハ 右ノ五經ニ 樂記ヲ加フ 樂記 今ハ七テ 今 禮記ニ少

残レリ

一十三經ハ孝經論語孟子毛詩尚書周易春秋左氏

傳公羊傳穀梁傳周禮儀禮禮記爾雅

一論語四書ニテハ朱子ノ註十三經ニテハ何晏ノ註

一大學中庸本ハ礼記ノ中ニアリシヲ程氏別ニ出セリ

一孟子四書ニテハ朱子ノ註十三經ニテハ趙岐ノ註

一左傳ハ左丘明カ傳タル也春秋ノ傳ナリ

一穀梁傳ハ穀梁赤カ傳タル春秋ノ傳ナリ

一公羊傳ハ公羊高カ傳タル春秋ノ傳ナリ

一詩經ハ孔子ノ集タテヒシヲ毛萇ト云人傳ヲ作りシニ毛詩

ト云フ

一尚書ハ上古ノフミト云義ナリ書經ノ事也

一周易ハ易经ノ事也周ノ世ニテ撰レシ書也変易トテ陰

陽五行ノ變化スル道理ヲ説キ占ニ用ル書也世俗ノウラナ

ヒノ類ニアラズ

一春秋ハ魯国ノ日記也孔子是ヲ削リ正シ書改メタマヒシ

ナリ

一廿一史ハ支那ノ代々ノ記録ナリ

史記司馬遷作前漢書班固作後漢書范曄作三國志陳壽作晉書

唐太宗御撰宋書沈約作南齊書蕭子雲作梁書姚思廉作陳書同上

北魏書魏收作北齊書李百藥作周書令狐德棻作南史李延壽作北史

同上隋書魏徵作唐書歐陽修作五代史同上宋史脫脫作遼史

同上 金史 同上 元史 王禕作 明史 明史ヲ加ヘテ 二十二史ト云

一 子類ト云ハ 老子 列子 莊子 揚子 文中子 荀子 韓非子 墨子 孟子 管子 淮南子 孫子 吳子 尉繚子 ナドノ類ノ書ヲ云 皆其人ノ名ヲ書ノ名トシタ
ル也 右諸史ノ中ニテ 五品ニワカチアリ 孟子 荀子 楊子 ナド
シ 儒家ト云フ 管子 淮南子 ナドシハ 雜家ト云フ 老子
莊子 列子 ナドシハ 道家ト云フ 韓非子 ナドシハ 法家ト云
フ 孫子 吳子 尉繚子 ナドシハ 兵家ト云フ 子類ノ集ノ
タル書ニ 十九子 全書 二十九子 呂彙 諸子 彙函 ナド云
書アリ

一 集類ト云ハ 古人ノ文集ノ事ニ 屈原ガ楚辭 荀侍中

集 沈記室集 鮑敬集 ナドヲ始トシテ 數フルニ 遑アラズ 諸ノ文ヲ
集タル書ニハ 梁ノ蕭統ガ文選 漢魏百三名家 漢魏六朝文
集等アリ

一 新註古註ト云ハ 宋ノ世ノ學者 程子 朱子 張子 ナド云人ノ
註シタル書ヲサシテ 新註ト云 宋ノ世ト云ニ 二ツアリ 初ノ宋ヲ
劉宋ト云 後ノ宋ヲ 趙宋ト云 程子 朱子ハ 趙宋ノ人也
此時代ニ至テ 儒學ノ風 古代ハ 變リアリタル 觀アル故ニ 新
註ト云 古註トハ 漢魏 晉等ノ世ノ人ノ註ヲ云 漢ノ孔安國ガ
尚書ノ註 魏ノ何晏ガ 論語ノ註 晉ノ郭璞ガ 爾雅ノ註
ナドノ類ナリ

一 學文宗派ノ事 古學 朱子學 陽明學等也 漢魏 晉等

ノ世ノ学者ノ説ヲ用ルヲ古学ト云孔安國董仲舒鄭玄
趙岐何晏ナドノ学文ヲ古学トス

一朱子学又朱子ト云ハ宋ノ朱喜説ヲ用ルヲ云宋儒ノ
学トモ云程朱ノ学トモ云程子モ朱子ト同説ノ人也性理
ノ学トテ人々生レテヨリ備リタル性ヲ明メ悟リテ道ヲ
行フヲ云本然ノ性氣質ノ性ト云テ立テ教トス
一陽明学ト云ハ明ノ王陽明ト云人ノ学文也專良知良能
ト云事ヲ説タリ人々生レシツキタ智恵ヲ養ヒツタテ、万
事ヲ行フ事ヲ教タリ

一山崎流ト云ハ山崎嘉右衛門ト云フ人ノ学文也敬義ト
名乗リ云也周齋先生ト号ス專朱子学ヲ貴テ人ヲ

導ク此人後ハ神道ヲ学ヒテ名ヲ岳加ト改ム是ヨリ岳
加流ノ神道ト云テ弘メリ三元神此人初ハ禪僧ナリシカハ
道ヲ歷テ儒道ニワタリ神道ニ入テ終ラレタリ長生ナラズ諸
道ニワタレベキヲ僅ニ道ニテ終リタリ此流ニテハ詩作ル事
ヲ甚クヤシメニクムトナリ古ノ程子朱子ハ詩作ラサリシマ
○徂徠流ト云ハ教生物右衛門物部茂郷ノ流ナリ○伊藤
流ト云ハ京堀川伊藤元斎ノ流ナリ
一武備志大明第一
元候著卷二百二十日本考和書刀大小長短不同
立名亦異每人有一長刀謂之佩刀其刀上又挿一小刀以便
雜用又一刺刀長尺者謂之解手刀長尺餘者謂之急
破亦刺刀之類此三者乃隨身必用者也其大而長柄者

擺道所用可以殺人謂之先導其以皮條綴刀鞘佩
之於肩或執之於手乃隨後所用謂之大制○又有
小裁紙設機刀出於長門師兼常者最嘉又有作贗
禮賀不拘大小雖為刀其實每用○上等曰上庫刀
山城君盛時盡取日本各島名匠封鎮庫中不限歲
月揭其工巧謂之上庫刀其間師寧久者更嘉世代
祖傳以此為上○次等曰備前刀以有血漕為巧刀
上或鑿劍或鑿八幡大菩薩春日大明神天照大神
宮皆其形著在外為美觀者○如匠人製造之精不
論刀大小必於柄上一面鐫名一面記字師以為古
今賢否之辨鎗劍亦然○鳥銃原出西蕃波羅多伽

兒因仙來親古者傳於豐列造鳥銃一門價二十餘
兩用之奇中別列每此妙○制火藥亦得真傳用括
桐燒炭為領次取燄硝滾水煮過三次硫黃擇明淨
者為勻每銃用藥二錢多彈遠中四季各有加減之
方一銃總按三彈橫直分矣皆秘法也
一曰書同卷倭夷慣為蝴蝶陣以揮扇為號一人揮扇
衆皆舞刀而起向空揮霍我兵倉皇仰首則後下砍
來又為長蛇陣前耀百脚旗以次魚貫而行最強為
鋒最強為殿中皆勇怯相參○魏志卷三十倭人傳
曰兵用矛楯木弓短下長上竹箭或鐵鏃或骨鏃
一歐陽文忠公外集全集卷十五日本刀歌曰昆夷道遠不

復通世傳切玉誰能窮。空刀近出日本國。越賈得之
滄海東。魚皮裝貼香木鞘。黃白間雜鑰與銅。真鑰似
金真銅似
銀似。百金傳入好事手。佩服可以攘妖凶。傳聞其國居
大嶋。土壤沃饒。風俗好。其先徐福詐秦氏。採茶淹留
卅童老。百工五種與之居。至今畧玩皆精巧。前朝貢
獻屢往來。士人往往工詞藻。徐福行時書未焚。逸書
百篇今尚存。令嚴不許傳中國。舉世無人識古文。先
王大典藏夷貌。蒼波浩蕩無通津。令人感激坐流涕
鏽澀短刀何足云。○今按司馬溫公集略亦載日本
刀歌大同小異。故作秋玩作用。蒼波浩蕩無通津。作
嗟予乘桴欲往。學愚謂張鼎思之博洽。以日本刀歌

為歐陽永叔之作。然則後人誤入溫公集。與其先徐
福歐陽子以日本先祖為徐福者非也。

一兩朝平壤錄諸葛元曰七月十五至平壤安定館營

未定是夜賊至我兵遂亂。倭衆多載鬼頭獅面官馬

見之驚退陷淖中不得起。士皆卸甲下馬墜崖落窠

入爛田中。倭銳逼及之。七月十五大明曆二十年
本文祿元年秀吉攻韓也

一鞞 万葉集云和銅元年戊申天皇御製歌 文天

之鞞乃音為奈利物部乃大臣楠立良恩母 源俊

賴詠 賄弓歌敬本集俊賴家集第九雜上
又天本抄第一兼久四年百首賄弓引十又

手束乃弓ノ矢ヲハヤニ鞞音ニ的ノ鳴カハスナリ 顯昭法師云

左京大夫顯輔子
真卷弓ヲ用ニ鞞ヲ懸ク云
夫本抄ニ引ナリ
トトアリ家集ニハ
迎衛院御代

鶴ニとさ人の多めとすけとさうしぬすい里魂やう海魂
の里 除夜七魂來見報恩經

一 餅シホカカント云し京都五条の天神の社スウナヒユヤノハ少彦名余と云
ぬぬシホ大已貴余かりしシホ少彦名余ハ神代ハ醫の
ろとろして病といやニシナヒ禁厭の術とろして災とろして
とろとろひひゆひぬふ今も行希ふと本と供ふ祭あり
て木シケフモキ餅と多信の今とろして例じものりらと勝ヒヤウノ餅と子
世俗シホはまといく餅とカカント云し餅シホの長名とてろとろ
本シケフモキのケラト云草根ろり茶種ヒクシマ用る白朮ろりシホ或伝シホ二系シホ
テハ春カフフリ鳩ト云糕シホハカケテ造ル故カカント云シホハ諸ノ余シホ也此説
粉シホ子シホりテ造ルシホ波木ト云カキニカキモキヒノ略ナリ此説シホヨシ

一 矢ハ矢制 忌部正通曰軍陣箭入時敵射返其矢則矢
利矣以シホ山シホ鷄シホ蜂シホ鷄シホ鷺シホ羽シホ所作箭用為秘密也○山鷄
ハ爾テ不知死其性剛毅也蜂鷄ハ鷺鳥ニテ其勇ヲ賞
スベシ鷄ハ神武天皇ノ御ニ瑞ヲ見ハス鷺ハ日本武尊白
鳥ニ化シ給ヒシ事アリ右西条日本紀ニ見ヘタリ

一 神代ノ矛 上古ハ筑紫九國ヲ總テ日向國ト云元明天皇
和銅六年日向國四郡ヲ割テ大隅國ヲ置ク贈シホ於郡アリ
高千穂ノ峯ハ日向大隅ノ界ニ跨シホ此峯西ハ稍卑シテ火常
ニ火ヒ上ヒ穴ヒ常ヒ峯ト号ス東峯ハ高ホシ鋒ホノ峯ト号ス山上ニ
靈シホ矛ヲ建シホ是神代ノ古物也此峯天孫降臨ノ地也天孫
自ラ後ヘ玉シホ所シホノ矛也正利曰矛長八尺許鋒横手ヲ施シ

十文字ノ如シ鉄カ石カ分テ難シ近世嶋津義久其様ニ依
テ新造シテ配立之^{マツモ}右東西ヲ併セ名ツケテ今ハ霧島
ト云其峯^{マツモ}而務^{マツモ}フカキ所也日向国風土記曰臼杵郡知
鋪郷天孫降臨時雲霧冥晦不^{マツモ}見物色天孫乃拔縮
穗散之四方忽開晴因是名曰千穗峯

一馬ニ咬レタル者ハ其勢キ^{マツモ}火ニテ燒カ如シ甚^{マツモ}イキレ苦シ
ムモノ也是ヲ治スルニハ^{マツモ}柳ノスミヨリ水ヲ吞シムヘシ忽^{マツモ}狛去
テ痛ミ輕クナル也扱スベリ^{マツモ}覓^{マツモ}ヲツキタラカシ^{マツモ}煎シ吞ベシ^{マツモ}
ニハ粟^{マツモ}子ヲカミリタキ付テヨシ

一^私甲ノ緒其外軍中著具ノ緒ノ結^{マツモ}ハ^{マツモ}組留^{マツモ}ノオクナリカタ
ワナニ結テ緒ノ端ノ方ヲワナヘ入レワナヲ一^{マツモ}ワ^{マツモ}結^{マツモ}テ又端ヲ

ワナヘ入レ又ワナヲ子ジリ端ヲ入レ如此スレバ三^{マツモ}折ノ如クナルヲ
ホドケスルヲナシ行騰ノ緒弓小キナドノ緒モ同

一鳴弦 日本紀雄略記二十三年 空彈弓弦於海
濱上搜神記曰楚王遊於苑白猿在焉王令善射者
射之矢數發猿搏矢而笑乃余由基由基持弓猿即
抱木而啼及六国時更羸謂魏王曰臣能為虛祭而
下鳥魏王曰然則可至於此乎羸曰可有頃聞雁從
東方來更羸虛祭而鳥下焉○萬葉集云梓弓凡引
夜音之遠音^{マツモ}余毛君之御幸^{マツモ}平聞之好毛^{マツモ}
一靱負 日本紀清寧紀靱負^{マツモ}
一蘆藿 日本紀顯宗紀○蓋枝釣之義屋根篋垣也

一胡床 倭名抄胡床此間名阿久良今按編座之義也梁度肩吾胡床詩傳名乃外域入用信中原足款形已正文斜躡自平三才圖會搜神記曰胡床戎翟之器也風俗通曰漢靈帝好胡服景師作胡床此蓋其始也今之醉翁諸倚竹木間為之制各不同然皆胡床之遺意也○日本紀作胡床古事記作吳床猶胡桃一名吳桃也

一鞍馬 カガリウニ 日本紀欽明紀二見夕リ推古紀作飾騎莊馬 鞍馬二字出史田叔傳

一稻荷神社 神名式山城紀伊郡稻荷神社 風土記曰稱伊奈利者秦中家忌寸等遠祖伊侶具秦公積稻

梁有富祐乃用餅為的者化成白鳥飛翔居山峯遂為社名諸神記曰稻荷秦氏之祖神也今按社司亦至今秦氏

一赤幡 緋幡 古事記曰丹書著其緒三騎子載赤幡立

宮內省式曰供奉雜物皆懸幡上立豎少緋幡以標幟

一勘當 湖亭涉筆曰通鑑唐高宗紀詰更加勘當此言據律按罪與俗間所稱不同而字義有所從來

一矢 三十具日本紀欽明紀二年見夕リ類聚三代格二以矢十隻為一具 延喜兵庫式以五十隻為一具

一具訓齊明紀

一鞍韉 日本紀欽明紀三年韉有異○杜詩雪沒錦

鞍韉○說文韉馬ノ鞞具也○傳名鈔云之太久良
 ○拾遺集云 左馬省公以八官方制をみりのまかへりし
 志々々々つらとて 正統の本乃下膳くらりゆふの月々
 色々々々やえ 本の志々々々々々
 シタクアラ入タリ ○延喜式有毛韉鞞文韉等
 訓比幾波多言如蝦蟇皮膚膏也○拾芥鈔曰三位以
 上竹豹切付四位豹五位虎六位羣鹿○饒抄四位
 以上豹五位以下虎皮○元明紀曰靈龜元年禁文
 武百寮六位以下用虎豹羣皮金銀饒鞍具并橫刀
 帶端但朝會日用者許之婦女依父夫蒞服用示聽
 之 之
 一金饒刀 日本紀欽明紀二見

一領巾 日本紀欽明紀歌柯羅俣尔能基能陪你陀
 致底於譜磨故幡比例南囉須母耶魔等陞武岐底
 ○萬葉集云大伴佐理比古郎子特被朝命奉使藩
 國艤棹言歸稍赴蒼波妻松浦佐用嬪面嗟此別易
 難彼會難即登高山之嶺遙望離云之船帳然斷肝
 默然銷魂遂脫領巾麾之傍者莫不流涕因歸此山
 曰領巾麾之嶺也乃作歌曰得保都必等麻豆良佐
 用比米都麻胡非尔比例布利之用利於返流夜麻
 能奈○肥前風土記松浦縣縣東三十里有帆搖岑
 俗傳云昔者檜前天皇之世遣大伴鈔牟比古鎮任那
 國于時奉命經過此處篠原村有娘子名曰乙等比

賣容貌端正幼年比古便婢成婚離別之日乙等此
 賣登此岑拳招因以為名○續日本後紀嘉祥二
 年幡摩國佐用郡佐用津姬神預官社○峯相記曰
 松浦佐子媛大伴佐提彦妻也佐提彦渡唐遂不歸
 而死佐子媛悲嘆之餘乘死于此地故祭為神○今
 按松浦郡亦有佐用嬪祠云遣唐使佐手彦丸記曰
 天平勝宝元年四月二日進禿同二年九月十四日
 歸著紀伊國疑此是別人○日本紀領中崇神紀十年武垣母彦之妻君田媛密來之取倭香出
 新日
 一作大楯及歎 推古紀
 一繪干旗幟 推古紀○延喜式所載元日及即位時所

建之仗旗殿前鳥像幢左日像幢次朱雀旗次青竜旗右月像
 幢次白虎旗次玄武旗左右近衛府陣竜像羸幡一
 旒鷹像隊幡二旒小幡四十二旒左右衛門府陣鷲
 像羸一旒鷹像隊幡二旒小幡四十九旒左右兵衛
 府陣虎像羸幡一旒熊像隊幡四旒小幡九十六旒
 ○姓氏錄幡文造魏文帝之後雄畧時歸化男龍善
 繪工天智御世賜姓倭畫師
 一司馬法曰章夏以ラス日月上明タテ高以虎上威周以竜上
 文
 一掖玖貝ハカヒ日本紀推古紀掖玖人釋日本紀和記曰
 掖玖西海別島也出美貝今俗謂夜句貝○倭名抄

有名四天星者蓋始于此也。又按未聞塩殺子有白膠木名。考本草。楓香脂名白膠香。金光明經謂其香。為須薩折羅婆香。軒轅本紀曰黃帝殺蚩尤於黎山之丘。擲其械于大荒之中。化為楓木之林。述異記曰南中有楓子鬼。木之老者為人形。亦呼為靈楓。至今越巫有得之者。以彫刻鬼神。可致靈異。據此白膠木之為楓。不可疑。而楓和名加豆羅。有勝軍木之義。又名加倍豆。倭歌往往并稱奴流豆。可倍豆。以賞其丹葉。亦相近耳。

一 鑑コヒノ訓 日本紀有明紀鮎旗二具フタツヒ 源氏
初イハレ 皇御子の所耐子二イハレ 皇御子の所耐子二イハレ

ろい具之しもの謂也

一 健兒シテイ 日本紀皇極紀健兒元年八月文ニ ○年イハレ

らんていしもの ○雞肋編健兒之語見平晉段灼傳

梁陳伯之傳至唐尤多 ○杜詩淇上健兒歸莫懶註

健兒軍士之總稱 ○字典天寶十四載京師召募十

萬歸天寶健兒 ○韻瑞唐舊制戍邊者三年而代以

其勞於途路募能更任三年者謂之健兒 ○續日本

紀聖武紀天平十年停諸國健兒續日本紀廢帝天寶元年

伊勢近江美濃越前等四國郡司子弟及百姓年四十已下二十以上練習弓馬者以為健兒

一 一人當千日本紀皇極紀 一人當千 ○見北有唐邕傳及涅槃經等又李陵答蘇武書一以當千

一 纈 倭名鈔纈和名抄ニナシ讀由波太東官切韻纈結帛為文綵也今按式有一目纈二目纈蓋結機也須氏物語下粘染といふ多め今倭ま志る染し奧義抄古歌柏木のゆゑは纈のありは原のゆゑ 二 義實錄曰纈秦漢間有之○日本紀天智紀纈ユタ一 桃漆布ソノ日本紀天智紀見當訓阿良曾采江次弟荒漆 万葉集桃花福延喜衛門式衛士桃漆布衫彈正式縫殿式退紅亦同訓王建詩肉色退紅嬌註淺紅色 一年忌月忌 持統天皇紀日本紀二年二月每取國忌アラス且要須アラス也○或曰天武國忌為九月九日而今二

月有此勅則取每月九日為國忌歟世所謂月忌蓋出干此也今按或說謬矣此指九月九日為國忌日但因此日有勅以記之耳所謂年忌月忌固非古也唯十三年忌出干固俗見元享秋書然未詳其始東見記曰櫻町中納言欽修少納言信西十三年忌其弟高野僧明遍不從仙者四十九日而止後世做儒者祭法始有年忌之說相國寺僧瑞溪考一切經曰經中每年忌服紀之事蓋假儒而用之也垂加翁曰君父師死日每月素食明文每之蓋國俗也新後拾遺集有三十三迴忌續日本紀曰此日當太上天皇七七又曰設太上天皇百七齋千諸齋三代實錄四

十九日訓波互乃此大藏一覽曰中省極多七七四
 十九日定結生五雜俎曰死每七日則備一祭謂之
 過七至四十九日而止或有延僧道作道場功德者
 播紳禮法之家不爾也死後朝夕上食至百日而止
 一手跡 漢書郊祀志天子識其手師古註手謂
 所書手跡
 一瓦舍 聖武紀見。瓦覆。有明紀元年十月丁酉
 朔己酉 聖武紀曰其板屋草舍中玄遺制難言易
 破彈民財諸仰有司構立瓦舍塗為赤白。神龜元
 年十一月甲子。紀アリ
 一石垣 有明紀累石為垣

一幕 紺幕見有明紀
 一箭鞞 延喜式柳篋アリ 日本紀天武紀箭竹二
 千連
 一大角小角 天武紀二アリ 鼓吹同上 弩拋同上
 一暗号 言金 天武紀見是暗号也
 一掩鼓 御梅 天武紀見
 一牧 天智紀多置牧而放馬。倭名鈔牧和名每万
 岐蓋馬柵也文武紀曰令諸國定牧地放牛馬拾芥
 抄牧名部拍前真衣野穗坂已上甲斐。石川由比
 立野小野秩父已上武藏。山鹿塩原岡屋平井手
 笠原高位宮處。原大野大室猪鹿菰倉新治長倉

塩野望月已上信濃○和^ト列有馬嶋治尾拜志久野
市代大藍塩山新屋已上上野○詳^リ既牧令馬寮式
一草名真名事 吉部秘訓抄第三報牒可加草名近
代真名也 又云吉書署事中少年次第云内案加
真名正文加草名

一諒周時女房裝束事 吉部秘訓第三御車後被出
綾白衣^{カラキ}故鍊^カ賈^キ白唐衣用白^カ緒^キ每引腰近代諒周之
時如此右府^公兼^雅被^テ終云自身重服人每引腰於諒
周者可石之而安元諒周以後如此^云云相国禪門
忠雅余又以同前尤可然然而當時中宮兩女院皆
以如此仍且就時議且依傍例如此^云

一称唯 同書云伺御自称唯^{同下被}又云称唯六度也
猶阿被出之^{出之}称唯八人物云カケ夕^夕時ノ返事之詞^夕
アト云ナリ貴人ノ返事也

一有^{同書云}七帶^云称^云風^云切^云事^云 ^{付通用石文} 建久四十一^{吉部秘訓}廿五同記云午
刻詣右府^公兼^雅其後心闲未謁申之故也世上身上多尽心
事其次被^テ終云一夜行幸親宗郷^{平中}先^{納言}称^云參^云政^云申^云矣

玉帶基親郷^{兵部}通^云螺^云鈿^云并^云有^云風^云切^云事^云 ^{有云之帶} 帶^通用^云物^云也^云可
准有文云此事傳聞之甚以奇異第一虚言也帶束帶
ノ石ノ帶也風切之帶^云有文玉ノ帶^云准^云云^云虚^云言^云也^云
一保元平治物語作者之事旅客問答云云云問云曰^云舞^云
々^云何^云比^云ノ者^云云^云候^云哉^云夫答云曰^云傳^云兼^云云^云今^云ノ舞^云々^云申^云

者世間ヲ往来スル声聞士カ仏菩薩ノ因縁ヲ唱人ヲ
勸ル学ノ源平以後兩家取合ヲ作テ是唱人ノ心ヲ唱人
ノ心ヲ慰ル是今ノ舞也也有説云多武峯源喻僧正トテ
宏才有智ノ貴僧御座ス此僧正保元平治源義賢與
義平一乱ヲ作出シ玉ノ実^ミ是聞事也然ルヲ勸解由ノ
小路烏丸久兒若ト曰因縁舞ノ上キアリ此久兒若ハ五条
ノ橋邊雲若ヨリ捨子トイフ鏡モアリ又北野一化生シ老童
ト曰義モ有之如何様權化ノ者也朝夕仏菩薩ノ因縁
ヲ舞テ歡意ヲ慰雲ノ上ニ送日月彼久兒若コノ曲ヲ
聞及登リ多武峯源喻僧正ニ彼双紙ヲ申給ハリ種々
ノ曲節ヲ付先大納言藤原経実卿ニテ申之ヲ経実王

上ノ内祖父也経実卿天奏ス二條院^仁有御感任權大夫
申ス是モ二條院ノ御宇ニ樂ノ前ト云内裏ノ女房アリ十ニ依
樂死スルニ依テ得^ニ其名宿習難追猿来テ錯契男一人
生ス此子面猿五躰ハ人也最上利根ニノ聞一字覺十字受
一度不聞ニ二度就中物ノ学ヲスル事ヲ得タリ仍久兒若禁
中ニノ舞ヲ申時ニハ其^本理聞テハ立テ其体ヲ学ル希代ノ
不思議ノ者ナレバ所詮ソレノノ面ヲ懸テ可躍ル面ヲ被
恒々朝廷躍蒙歡感サレハ父母ノ一字ヲカ父取其名ヲ猿
樂ト申サレバ猿樂ヲハ庭ノ者舞舞ヲハ縁ノ者ト申是也
○右旅宿問答ハ武藏国波楽郡別府郷ノ任人彦衛門
ト云神職ノ太夫ト上総国萩原行願寺天台宗ノ住僧

此乃ハ果實也其味ハ苦シクシテ酸味ノ有リト云々
也此亦古事ナリ

一古書ヲ讀めりノ名又平文ト云ふノハ金泥ヲ用テ
すり小信ともくとさりハとセりト云々ハ平ノカらスルト云々ナリ
貞女考

一製刀劔日時ノ事 真喜志林云古人鑄刀五月丙午取純
火精以協其數 日本紀通鑑ニ引之
○カヲ鑄ノ鑄ノ字ヲ鍛ノ字ト見ベシ

一殿ノ三位中將師家盛衰記ニ見ヘリ太平記ニ殿ノ法印
良忠アリ或人云関白ノ子ヲ殿ノ中將殿ノ法印ナドト云
ナリ

一真桑瓜 本名 舂瓜 ニガ
ウリ 真桑ハ美濃国ノ地名也其地ノ

瓜名産ナリ

一作鞞矩 意ハ一尺一寸二分前後ハ間四寸六分ノス程九分前

馬ハ廿三寸七分後馬ハ廿三寸四分前瓜六寸八分後瓜八寸三
四分後山形二寸三分程是ヨリ短キハ悪シ

一也志源氏ノ軟障ト書ク高キ松クト云々源氏
ニ見エ 雅亮装束抄ニ
源氏物語ニ見エ ○

一狎使知ベキ事 ○切疵ノ見分ケハ死後ノ切腹ハ太刀疵内ニミ
レ入シカモ骨肉ハヤレ肉乾クシ生キタル時ノ切腹ハ疵外ハヤニ
骨ト肉トハヤレズ肉ノ内ウルホヒアリ ○焼死タルヲ見分ルハ生
タル人ノ焼死タルハ鼻ノ内フスホリ黒シ死タル人ヲ焼タルハ鼻
ノ内黒カラズ ○首縊ノ見分ハ生タル人ノ首クナリタルハ縊ノ

一百寮之進止威儀教之同紀同年閏四月二見

一給送位記同紀卷三十天智紀十一下

一柏手 同紀十二下

一進新 同紀十二下

一雙六禁断 同十二下

一令一部二十卷 同紀十下目大宝養老ヨリ以前ノ令ナリ

一母衣ハ前ヘカブリテ城中ヨリ射出ス矢ヲフセク物ナルベシ

ト云フ考^予 壘囊抄云武士臨戰場被護防敵矢云云 著ス所ノ保呂衣推考

ニ記ニ置タリ 爰ニ遠江國豐田郡萱場村ノ農民利右

衛門ト云者アリ 其先祖ハ武士ナリシトゾ 其利右衛門ガ

弟ナル森田庄セト云者 予ガ家僕ニテアリシガ 或時其庄

七語リケルハ臣ガ兄利右衛門ガ方ニ昔ヨリ傳リシ古キ屍風ア

リシカ大ニ破損シテ繪モ剥レテ切ニナリ小兒ノモテアツビト

ナリシ 其中ニ母衣カケタル武者ノ繪アリ 是ハ大ニ破レホリシ

カバ取テ納メ置シカ年月ヲ経ルマ、弥クコ子ツヨクナリシ其

繪ノ舩鏡ノ形 今ノ鏡ニハ似スシテ繪抄ノ如クナリニ足ラ

フミ入タリムナガヒニモフサハナクシテ形少細長クシテ其廻リハ

ハシレ雪ノ故ノ如クキサミナマリ 母衣ノ色ハ白シ其母衣カケタル

舩後ヨリ前ノ方ヘ引カブリテ武者ノ頭ハ見エヌ馬ノ頭ノ後

邊ニテカリテ西端ハ西方ヘ垂レタリ 隅ニ扇形ニ青赤黒ツ

糸ニテ三重ニ刺シタル針ノ目ノ如クナリ 彩色アリ 西ノ隅ニ鏡

モアリシ此繪ヲ見ル人ニ母衣ハウシロニ丸クゴノアルモノナリ

二前へカブリタルハイカナルヲニヤト不審シアヘリト云此説ヲ
聞テ其繪抄ノコトクナル鐘ハ壺鐘ナルベシムカヒニ付名
モノハ杏葉ナルベシ母衣ヲ前へカブリタルハ矢ヲ防ク形ナル
ベシ其繪ハ古代ノ物ナルヲ疑ハシ其繪ヲトリヨセテ見セヨ
ト在セニ余シケレバ飛脚ヲツカハシテ求メシニ年月ヲ経ンマ
ニ強ク破レ損シテ少モウキタル所ナカリシカバ押モミテ
捨タリト返翰ニ記シテ来レリ嗚呼惜哉其古画ニガ考
ニ符合セシ物ヲ見カルコト深キ憾ナレ依之右ノアラミハ
カリヲセメテモノノ一ニ記ス

一鐘ニ近世最上形ト云アリ鉄胴ナリ折延ニアラス段ニニシ
テ鋳ニテトケタルヲ云ナリ

一因六月ノ時ハ水毎月後ヲハ因六月ノ晦日ニスル也家持歌
集ニ見ヘリ讀人不知 七夕の天の川ハ七モドリ後ノ
晦日ニ御後ト云ナリ

一倭姫命世記云^{カクシ}神法息奉拜神祇^{礼云}倭姫命ハ
垂仁天皇ノ皇女也垂仁ノ御宇仏法イマダ日本ニ渡リ来
ラズサレバ仏法ト云事ヲバ曾テ知り玉フニキナリ然ルニ
屍仏法息トアルハ偽書ナルヲ明也ト云説アリ又其比
イマダ文字渡リ来ラズ倭姫命文字ト云物ハ知り玉フ
ベカラス文字ナキ時代ニ世記ヲバ何ガ書キタニヤト云
説モアリ照レトモ彼書ハ倭姫命ノ自ラ記シ玉フニアラ
ズ五月麻呂ト云人後ニ書シ物也ト云〇凡伊勢ノ五部ノ

書ハ後人ノ偽作也其證ハ公家ノ語交リタリ
一インゲンノ草ト云ハインデアノ訛リ也應帝亞ト書ク也采
覽異言曰應帝亞古ノ西印度也北ノ莫臥兒モウリ接壤其餘
三面皆際大海蓋亦大國西洋諸番之會也ト云ハ印度ハ天竺
國也インデアハ西天竺ニ其國ヨリ渡ル草ト云ハインデアノ草ト
云ハインゲント云ハアマリナリ

一ムスコバヤノ草ト云ハモスコビヤノ訛ナリ
ト書ク也采覽異言曰波爾箇未突一作莫國在歐羅巴
東北地トムスコビアノ國ヨリ出ル草也

一モ、ヒキキヤハナドニ付ルボタンハ阿蘭陀人ノ裝束ヨリ出
ル物ニ采覽異言ヲラント又呼フ唱蘭地又作和蘭別名紅夷和蘭

本北海小島名中略其人皆長大色皆赤髮蓬首藍青點
白男子頭戴纏笠ヲ衣物多用毛布花布ヲ袖窄衫僅
容支體其長至膝兩襟雙臂鉤以鑄金衣紐衣紐云
波爾杜瓦呼為フタニ云蘭國ニテハゴノフト云ナリホルトカル國ニテ
ハフタント云ソレヲ云タガヘテ日本ニテホメシト云ナリ

一兩衣ニ上古ハ貴賤トモニ著ク著クナリ近世ニ至テカワハト云フ
物ヲ著スカワハト云物ノ本ハ今世ハウズカワハト云フ物其始也袖
ナキモノナリソレニ袖ヲ付タル物出来シユヘ本ノカワハヲハ坊主
カワハト云ナラハセリ合羽ト書ハアテ字也カワハモオラシダ人ノ
衣服ヨリ出タリ采覽異言唱蘭地ノ篇ニ云又披皂纒
如吧ヒキ為ニ壯服ト猶シ浮屠ノ着僧伽黎ヲ
波爾杜瓦呼為フタニ云波爾杜瓦呼為フタニ云

雨衣蓋做其制也ト云和蘭人ノ上衣ニスルモノ此方ノ坊至カツハノ如ク
ナリ和蘭詞ニテハニシトルト云ホルトガルノ詞ニテハカツハト云也其カ
ツハト云物ヲ似セ作りテ此方ニテ雨衣ニ用ユ是ヲカツハト名ツク
ルナリ

一毒消ノ菜ニ用ルウニコウルト云物本名ハウニコル也ウニコウルト云ハ
訛ナリガルウニコテアト云国ニアル獸ノ角ナリ采覽異言ニ曰
ガルウニコテア卧兎傳又作卧蘭的亞地最荒潤南阻歐羅巴北海北
接亞墨利加北東東西不知其所極也中略又有海獸形如馬
而有三角一徑拾得其角大至七八尺入菜神驗勝於犀角
名曰ウニコルト方語ウニ一也コルハ角也トモ真ノウニコルハ色ナ
黄ニアリ打破リタル形豎ニ竹ヲ割リケル如ク節見ユ也色白

クシテ割リノ竹ヲワリタルキメノ如クナラハルハ白犀角ノウニケルニ
非ス

一ニイラト云サホハアラビヤト云国ヨリ出ル采覽異言曰アラビヤ
亞蠟皮亞又作托落野其地曠漠北接亞利土利馬入多加臘馬
溺亞等ノ国其餘三方皆際大海此地出ス一種菜物地名アラビヤ
カレ云是地氣極熱暍死人肉焦爛而化ス諸疾皆驗質
之ヲ和蘭人曰疑是人肉菜物煉和所成耳蓋元人陶九成
說輟耕錄出天方国所出木乃伊番人所呼名亦相似アラビヤ和蘭呼テカモミ果然則所謂天方国在海西之尽者亞蠟皮地即
此ナリ

一日本ノ馬ト巴尔奔亞ト云フ国ノ馬トハ一方国ニ勝レ御書ト云也

采覽異言巴爾奇曰和蘭人說天下產良馬唯在上國與
巴爾奇亞巴爾奇已他邦所出真是好村皆不足觀焉美竊嘆
曰昔田饒事魯而不見察告其君曰臣將去君黃鵠
拳雞有五德烹食之以其後來近也鵠在此五德而君
猶貴之以其後來遠也吾安知吾產為天下良馬也耶
慶長元和間暹羅占城諸國歲貢馬和蘭之說蓋
不誣矣

一布帛ニサントメ島。ヤウ嶋ト云フ物アリ。サントメイ。ト云國ヤ
ヤウルト云フ國ヲ渡ル物也サントメイ。云國ハ應帝亞ト云フ
國ノ東ニアリヤウルト云フ國ハ應帝亞ノ西ニアリ皆天竺國
ハ内也采覽異言應帝曰美按西圖此國東有サントメイ西

有チヤヤウル皆屬部也洋舶所載菓有各色間道鍛布係兩
地名者其所產也圖說ヤウル作チヤウ兀兒サントメイ名蘭云
○貞天按布帛ニ助ヲ織タルヲ古代ハスビト云シ也近代ハ是
ラシト云島ノ字ニテ外國ヨリ渡リ來ル者サントメ。ヤウ
ノルイ皆竹助ヲ織タル物也依之スビヲ島ト云也島ト云ハ日本
ノ地外ノ國ヲ指ス詞也

一度景ノ始リハ慶長十五年ノ秋ノヲバイスハヤト云國ノ商
船難風ニ逢テ吹流レ日本へ來リシヲ 公ヨリ命アリテ其船
ヲ修復シ糧米ヲ給ハリテ還カレケルニ同十七年其國ヨ
リ使ヲ日本へ遣シテ謝シ奉ル其礼物ニトケイヲ献上シ
タリ此時ヨリ始テ日本ニ度景ト云物アリ采覽異言曰

と云ふ事の内々にて有るの何と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 の何と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 轉してゐると云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 後世に於ては其の織多の字と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

一天目ノ形 万宝全書



建山天目



木天目
唐物也

一建盞 万宝全書 地茶梯上茶黒シ木目ナリ



非ノギメ

一閣浮檀金 宣徳しやふりつる黄唐令し新し小佛子鉢

ゆつて万国へつりつる今日日本も閣浮檀金と稱するは比賣宣
 徳唐令のゆりおし 万宝全書ニ見

ヒヒナアソヒ 日本紀卷五崇神天皇紀ノ中童謡ニ比賣那
 素寐殊望ト云詞アリ歎日本紀ニ是ヲ歎シテカナス児女之

遊今按比比那遊也ト云へリヒメトソビハヒメノアソビノ異也
 ノアノ切音ナ也比比那アソヒハヒメノアソヒ也ヒヒハヒメノ轉語

也ヒメトヒミトニ通音又轉シテヒヒトナル偶人ヲヒヒトト云
 ハヒヒトアソビニ用ル物ノ第一ノ異ナレハナリ

一たはからつる云ふり 和歌よりかゝるあり和束ツカらつと云ふ
 る束といふもあつる也あつるもあつるもあつるもあつるもあつるも

かゝりつゝと云々...
たつたかとも云々...
ともかとも云々...
多都タフカ可豆カフエ惠とあり

一今疫病除ノ守トテ漸ノ字ヲ門戸ニ貼貼ハ漢舊儀曰儼儼
立滄耳滄註即漸耳也又通典二。司刀鬼名漸一名滄
耳五音集韻漸子役切音積人死作鬼鬼死作漸
篆書此貼貼門則離鬼崇千里。又酉陽代醉代トド委委
得得海一得得見

一鷓鴣ミサゴ西海上ノ巖ノボキ中ニ往々ニ鷓鴣ミサゴアリ海上ノ人
探得テ珍味トス是ハ海鳥小魚ヲ捉リテ石籠ノ中ニ貯貯
ハ潮汐ニ浸漬シテ自然ニ熟セル物也丹後丹後ノ人昨昨夕

ルトテ狀ニ鴈ノ字ヲ書テオコセタルガ讀スト云人アリシ説
文ニ鴈ハ似似山鵲山鵲小アリテ魚ヲトルカ名ナシ閩閩隹ノ説ニ
郭璞曰鷓鴣ハ隹ノ類也今江東呼テ為鷓鴣好テ食魚ト
アレハ鷓鷓ノ字ガヨシ下略 右同書

一琉球ノ先祖舜天王ハ鎮西八郎為朝ノ子ナルヨシ東涯
白石白石トド明ニ記セラレタリ中山傳信録ハ清ノ徐葆光琉
球ノ冊封使トメ彼國ニ行キ淹留シテ番ヲ記セシ書ナリ
康熙五十九年ニ著ス即チ日本ノ享保五年庚子ナリ舜
天ノ事ヲ記メ云舜天ハ日本人皇ノ後裔大理按司朝
公ノ男子也淳熙七年庚子二年十五屢有奇徵長力
浦添按司人美美其政斷獄不違時琉球政衰衰逆

臣利勇執權鳩其君而自立舜天討之誅利勇諸司推
奉即位年二十二實宋淳熙十四年丁未也在位五十一年壽
七十二喜熙元年丁酉薨ト按此丁未西カ日本文治三年
嘉應二年庚寅為朝追討ヲ距テ十八年ナリ然ラハ舜天五
伊豆ノ大島ニテ出生ノ人右書

一重金丸ノ太刀ハ琉球ノ宝物也右同書ニ又曰今歸仁府國語
堀管下ノ親治村有獲劍溪昔山北王戰敗以寶劍
自剄不能斷擲于志慶真川百年之後溪至永漲溪
光挾天ヲ伊平屋人得之獻王今王府第一寶劍也劍名
重金丸按日本ノ中古ニ丸ヲ以テ劍ニ名ル事髭切丸膝丸小
鳥丸友切丸ト云性古此名ナク後世ニ毛爾夏ナシ此重金丸

毛為朝所傳ノ劍丸ヘシ

一步障 蒙求ニ王愷作紫絲布步障四十里石崇作錦步
障五十里以敵之里ヲ丈ノ字ノ誤ト云説非也通鑑綱目集覽曰步障今
聖恩是也以小竹交結為之衣以布或帛可舒可卷辛里ハ
石同書見

一談海卷廿六曰寬文十一年亥年十月ノ比小笠原丹春小式
正之御弓箭旨々々仰付出来ニヨウテ今日差上於御座
之間備 上覽

- 御弓二十張
- 一青漆御弓二張對
- 一赤漆御弓同斷
- 一黃漆御弓同斷
- 一白漆御弓同斷

- 一 黒漆御弓同断
- 一 三所藤御弓同断
- 一 村重藤御弓同断
- 一 尔禽御弓同断
- 一 卦朱御弓同断
- 一 紫漆御弓同断

以上右何茂袋入

御鎗矢十二筋

- 一 愛敬之御鎗矢一午
- 一 三角御鎗矢同断
- 一 揚柳之御鎗矢同断
- 一 漆羽之御鎗矢同断
- 一 荒目之御鎗矢二午

以上

貞丈曰右ノ御弓三所藤弓村重藤黒漆弓ハ古書ニモ其
名見テリ青漆以下五色尔禽卦朱紫漆等ノ弓ハ古書ニ

曾テ見サル弓且小笠原家ノ古傳ノ書ニモ曾テ見ヘス且
品々ノ鎗矢モ古書ニ見エズ小笠原ノ古傳書ニモ見ヘズ皆
丹脊ガ妄作ナルベシ式正ノ御弓矢ト云テ信用スベカラス右ノ
鎗矢ノ品々モ古書ニ見ヘズ荒目ニテ神頭ヲ作ルハ高忠
書ニ見エタリ

一 帳臺 チヤウタイ 塗籠 チゴ 眠藏 シガウ 此三ツハ座敷ノ名ニ帳臺ハ主人ノ

常ノ居間也客殿 キヤクデン 客殿ハ對 面所 ノ方ハ出 ル 帳ヲ垂ル故帳臺ト云

也 帳ト幕又ノウレシノ如シ 帳ト幕又ノウレシノ如シ外ノ座敷ヨリモ壹尺斗高ク作ル故臺ト云

付ル此所ニ色々ノ手道具ヲ納メ置也下々ニテ寐間ト云同シ

此所ニ主人ノ寐ルニハ眠藏トモ云寐ル所ナリ故用心ノ為ニク
チヲ多クアケズ對面所へ出ル所ノクキト勝手へ行クキトニ

方ハカリアケテ其外ハ壁ニテヌリフサグエハ塗竹籠也
一久喜或書ニ寺方ヨリノ進物ニ久喜一桶ト云フ事見エタリ
久喜ハカト書ハ本字ハ鼓ノ字ニ和名抄ニ鼓是義ノ切和
名久喜ト見タリ是今ノ世ニ豆ヲ煮テムロニ入テ子カシタルヲ
ナツトウト云フ是ハ納豆汁ニスル物也

一科藤ノ事 東西洋考云科藤蔓抽被地每枝葉有
波裏ツム其外如竹皮分ハ剥之則落長數丈不值剪伐可繞
數回○齊民要術云科藤圍數寸重於竹コト可以伐ハケ以
縛船及以為席勝竹コト今弓ニ卷ク藤ハ即此科藤也古
書ニ真カハ樺ヲ卷トアルハ藤ヲ卷ク事也藤ノ字竹カハリニ
書ク石ノ科藤ノ事也藤ハ字彙曰蔓生ハナ似竹コト右科

藤ハ細キ竹ニ似テ枝葉モナク蔓リ生ズ也サレバ三所藤重藤
ナドノ藤ノ字ハ竹カハリノ藤ノ字ヲ用コトベキコトホモアリ

一上下一引ノ夏花押ノ夏葉燭譚 伊藤元藏 長胤作云カキ利ヲ花押ト

云日本ニテ判ト云ハアマリコ判ト云ハ奉行役人ナトノ下へ出ス
裁判カキニスミ状ナドモ云判断ノ義ナリ文ノ一解ニテ判語
ト云アリソノ判ニ花押シタルヲ五花判ト云故事アリソノヤ
ウナルトヨリ轉シテアヤニルマ今時ノ花押ニ上下ニ文字
スルト明ノ太祖ヨリ初ルフト先人 伊藤仁存ナリ 元藏カ父ナリ常ニ物語ア
レ何ニ出ルト云コトヲ語リオカズ近比群誌珠餘ヲミレハ
第二卷ニ其夏ヲ云國朝押字之制上下多用一畫益ニ取
地平天成之意ト云フノ外ニモ又本書アルベシ 混陽漫録花押
ノ上下一引スル明大

祖ヨリ始ルト見タルカト覺エ違テ
可尋判ト云一今昔物語ニテリ

一案内ノ事 同書ニ云案ト云フハ公義ニテ文書ノヒカヘナリ今
口宣案ト云是又格之内ニ檢案内ト云一多シヒカヘ内ヲ吟
味スル一ト見ヘタリ今事ノシタケラシムラ案内ヲシルト云又
下カキヲ案文案紙ト云檢案内ヨリ訛轉ナルベシコレヲ
合テ案款ト云ハ何支ニテモセシギスル一也○貞丈按スルニ案ノ
字ハ洪武正韻彙篇ニ考驗也ト注アリカニガウルトヨク公義
之書キトメヒカヘハ後日ニ事ヲ考ヘキタメニ書キ留メテ置ク
モノナルス案ト云ナリ此案ハ新キ事ノ出来タル時ノ道引ト
ナル者也依之世俗ノ詞ニ人ニ道引リタムト云一ヲ案内ヲ請フ
ト云ナリ人ノ手引ラスル者ヲ案内者ト云フモ其意也人ノ

方へ事ヲ告ゲ知ラスルヲモ案内スルト云フ是モ人ヲ道引心
又人ノ家へ行テ戸ノ外ニテ物ニフ 物ニラサリト云一ヲ案内ヲ請
フト云是モ其内ヨリ家人出テ家ノ内へ道引入ル、ユへ案内
ヲ請フトハ云ハ皆カノ公義ノ書キ留ノ一ヨリ義ヲ轉シテ云ヒ
ナラシタル詞

一字彙ニ鳥見異則噪故以鳥呼歎所異也

一尾篋ノ二字ノ訓ヲコト續ニ字彙云鳥見異則噪故以鳥
呼歎所異也尾篋嗚呼ノ音ト同シ人ニホコリガハシキ事ヲ
ヲコノ者ト云ホコリガハシキ事ヲオコガハシキト云也毎礼ノ事
ヲ尾籠ト云ハ心得違也然レ氏ホコル者ハ礼義ヲモ知ラヌモノ
ナル故其意通ズル歎カレドモ尾籠ノ本義ニハアラスヲコト云

詞ヲ字ノ音テ假リテハ嗚呼ト書キ字ノ訓ヲカリテ尾籠
手古トアリ古事記ニ
 ト書シ日本紀ニハ表古トアリ皆字ノ音ヲカリテ書クル也老
 学菴筆 記曰 野人見人物之可誇者 則曰嗚呼
 一トカト云ハ可嘆トモ可笑トモ書クワラフベトヨムニ悦フ時
 ハ笑フモノシ古キ書ニハ物ヲホメル詞ニヤクケタムト云 詞ハ
 物ヲホメルハ心ニ悦フニ笑ヲ生スルニヤクケタムト云 又
 一ト云フハヤクケタムト云 今世見クククニヤクケタムト云 又
 ト云フハヤクケタムト云 詞ニヤクケタムト云 又
 リ物トモヤクケタムト云 又
 一 烟草ノ夏 タカト採覧 異言ニテリ 兼 烟草ノ夏 任是海島 久ハコハ南蛮ノ産ナリ
 百年前ニ日本ニ来ルソノカニ本草ノ莨菪ナリトイヘリ此ハ誤リ
 也其後沈穆カ本草洞詮ト云フモノ新渡リツノ九卷ノニ烟草
 ヲ出ス曰烟草一名相思草言人食之則時々思想不能離也ソ
 ノ説甚詳ナリコレヨリ世間ノ人々ニハ烟草ヲルヲシル四五十年先
 ニ朝鮮人之撰スル芝峯類説ト云モノアリソノ十九卷ノニ曰淡
 婆姑草名亦南靈草近歲始出倭國云々或傳南蠻國有
 女人淡婆姑ト云者患瘧疾積年服此草得瘳故名ト
 コノ書ハ朝鮮ニテ何人ノ撰ト云フヲシラス相國寺ノ白長老ノ
 後子ニ松村昌菴ト云老人アリ先子ノ田中門人ニメハコノ一段ヲ
 寫シテ傳フ全部ハ何ホトアルヲシラス對列ヨリ携ヘ来ルナ
 ルベシ予弱年ノ時ニ字オケリコレヨリ淡婆姑ノ名世ニ弘リ此日

一ト云フハヤクケタムト云 今世見クククニヤクケタムト云 又
 ト云フハヤクケタムト云 詞ニヤクケタムト云 又
 リ物トモヤクケタムト云 又
 一 烟草ノ夏 タカト採覧 異言ニテリ 兼 烟草ノ夏 任是海島 久ハコハ南蛮ノ産ナリ
 百年前ニ日本ニ来ルソノカニ本草ノ莨菪ナリトイヘリ此ハ誤リ
 也其後沈穆カ本草洞詮ト云フモノ新渡リツノ九卷ノニ烟草
 ヲ出ス曰烟草一名相思草言人食之則時々思想不能離也ソ
 ノ説甚詳ナリコレヨリ世間ノ人々ニハ烟草ヲルヲシル四五十年先
 ニ朝鮮人之撰スル芝峯類説ト云モノアリソノ十九卷ノニ曰淡
 婆姑草名亦南靈草近歲始出倭國云々或傳南蠻國有
 女人淡婆姑ト云者患瘧疾積年服此草得瘳故名ト
 コノ書ハ朝鮮ニテ何人ノ撰ト云フヲシラス相國寺ノ白長老ノ
 後子ニ松村昌菴ト云老人アリ先子ノ田中門人ニメハコノ一段ヲ
 寫シテ傳フ全部ハ何ホトアルヲシラス對列ヨリ携ヘ来ルナ
 ルベシ予弱年ノ時ニ字オケリコレヨリ淡婆姑ノ名世ニ弘リ此日

市店ヲ見レハ招牌ニテノ字ヲ書オケリ近年清人陳漢子ガ
花鏡一巻東来ス金絲烟擔不歸寺ノ名廿二ノセオケリ
擔不歸モタハテノ唐音ト見ヘタリ又行厨集ヲミレハ蒿ノ
字ヲ書ケリ是モ日本ニテニキノ木ヲ植ト書台ノ木ヲ植ト
カクト同シキヲニテ烟ノ音ヲ假リテ草冠ニ後ニ蒿ノ字ヲ
用タルト見ヘタリコノ外近年ノ本草ニハ種々詳ニ載オケ
リ又嘗テ記ス唐詩紀ノ内李白カ詩ニ相思如烟草歷
乱冬冬春ト云リ想思草ト名クルハコレヨリ出ルニヤ偶然ニ
符合セルニマ李白カ詩ハ本ヨリ烟ト草トノナリ
一烟草ノノノ落穂也云 ちほろちほろし 秋もも年のは成を人
はこほりあまうり のゆははいたるこトラスぬハち來ハ年ハ知ヌ五百年中一切支

丹宗門トスルヲ世々唐ノ何れもたるとも抑うゆと ぬもえ本
を南蠻玉し土産の名なりともあり作哉以前のまこととせ
るるともくハ細工人も稀とありハ五段ト云ハ末のこの
ハ形先トス取しぬ義ハ竹の筒の記をよゆと云ハたてと
わけ先の方と火皿と目して烟をよゆと云ハたてと云ハ
あふりともやうか中玉も美月ともて秋人ともて中玉
別名ゆき竹と云ハたてと云ハたてと云ハたてと云ハたて
その後ハ竹ともやうか中玉も美月ともて秋人ともて中玉
ゆき竹の筒と云ハたてと云ハたてと云ハたてと云ハたて
神作ともやうかゆき竹と云ハたてと云ハたてと云ハたて
と云ハたてと云ハたてと云ハたてと云ハたてと云ハたて

台徳院祿代の事ニカシムたしこと仰り申す所を流す
作心をもいふ所は成りて居るに於て人たること其のまゝの法を
以て仰り也

一事蹟合考云 柏崎系
目え作 台徳公御代の所御は 一説大開秀
吉ノ落キト云

たるといふこと法を以て後法なる家の持統を徳の勢と云ふ
所トメタキハ公家ノ持統タテホウス。フクナウケケウ。ゼ
タルノイシヤ。多しといふは其の如く人ノ新法なるも其の
心算を以てしるへん徳字は古の人をいふたもことと云はる
裁断正徳の如くしる多月の徳字はいふる教ふ是正徳
正徳なるをいふれぬものことと云ふ徳と云ハ下午醫者
十九日 右狂歌正徳元年八十二歳の老人鎮目正順と云人の語

腐鎖見ユ

一會津年譜云第百八代後陽成院文祿四年己亥此年金

一分判始焉菘若始用焉 菘若ハタバコニアラズ
昔ハタバコノ字ニ用誤ナリ
廣長年中始テ南蛮

ヨリ種ヲ傳ヘテ長崎櫻馬場ニ植ル其後山城國花山ニ刻賣是ラ
花山烟草ト云又吉野丹波(極テ諸國ニハヒコリ)

一采覧異言ニタバコノ事アリ既ニ上文ニ見ヘタリ 南留別志云五
百年以來茶ア

リ百年以來烟草アリ世ハヤウヤリ
事多クナリ又仏老モ古ハナキナリ

一懐懐食鏡ニタバコノ事アリ紫峯類鏡及本草洞詮ノ

文ヲ引ク往テ見ベシ

余々 ○珍書考ノ鏡末ニアリ

一たをこ吸るノ事傳テ平物ハ賣買者とも見カキ其
方亦秋と云テ下也又於此頃見たりと云はた

責主と所と押へま下とと別けらるる所は下改也
との下と見たり

竹於何他もたをいへるる

石上流内は意をたはるる作也何れは違
如件

昔十七年八月廿日 廣鏡集出此書誹借所立

志也の俗説多し烟具ノ字アリの名葉別ニ注ス

一東鑑ニ建久元年八月十六日余アリ三尺手狭ハ的ト云フアリ貞丈按ニ三尺ハ

三三九也三尺ヲサシサクトヨムベシ古キ詞ハ尺ヲサクト云古書

ニハ文字ニ拘ラズ詞ニ合セテ文字ヲ假リ用ルル多シ又東

鑑ニ三三九ト書クル所モアリ〇手狭トハ狭物也手ハ半

事ヲ云是ハ草木ノ花葉蛇貝杵扇ナリテ狭ニ立テ射ルル

ナリ〇ハ的ハ三的ト云フハヤブサメノ事也ト高忠聞書ニ見タ

レハ此説ニ據レハ的ハツカケテ射ルルナルベシ〇三尺ト手狭ト

ハ的ヲ三流ノ作物ト記シタリ河村三郎義季ヲ三流鑑馬ヲ

射サセントテ石ノ三流ノ作物ヲ射サセテ試ラレシ由見エタリ

三流作物ハ皆騎射ナルヘシ安貞二年十月廿二日由比浦ヲ

ヤブサメ射サセラレシ余ニ三的ノ後三三九四六三以下作物等

各射之ト見タリ騎射ト見エ

一庭訓往來ニ三三九手狭トアルヲ三三九ノ手狭トの字ヲ入

テヨムハ誤ニ東鑑ニ三尺三三九也手狭ハ的是ヲ三流ノ作物ト

記タリ三三九ト手狭トハ別々ナリノ字入ベカラズ

一助語辭ノ事和讀要領云凡文章ニ必助語辭アリ之乎
者也焉哉ノ如キ其類甚多之古人ハ助字ヲ用ル活法アリ
テ一定セズ且今人七字ヲ以テ言フ○之ノ字ハコレト讀ミノト
讀クテ常也毛詩ニ亦孔之將亦孔之喜亦孔休トイハレ此之
ノ字意多シ衍文ノ如シ如何讀ベキヤ楚辭ニ余既滋蘭
之九畹兮又樹蕙之百畝トアル此等ノ之字ハ於字ノ意
ナリ高唐賦ニ巨石瀾瀾之澆澆兮洪波淫淫之溶溶ト
アル此等ノ之ノ字ハ以字ノ意也雲興聲之霈霈神女賦
珮聲之珊珊トアル此等ノ之字ハ只語助ノ詞ニテ少モ
意多シ之ノ字ノ如シ詞賦ノ中ニ此類多シ箇様ノ處ニ
至テハ常ノ如クコレト讀レズトモ讀レズ○乎ノ字ハ多クハ

疑フ詞ニ用テヤト讀ミカト讀ム又歎スル詞ニテカト讀ムト常
ナリ又句中ニ在テ於ノ字如クナレ處アリ然ルヲ莊子ニ有乎生
有乎死有乎出有乎入トイハレ句中ニ在テ何ノ意多シ也
シ又燕王喜謝樂問書寡人雖不肖乎未如殷紂之乱也
君雖不得意乎未如高容箕子之累也トイハレ句末ニ在
テ何ノ意多シ也此等ノ乎字ヲ如何讀ニヤ○者ノ字
ハモノト讀ミハト讀ムコト常シ古者今者トイフカ如キハ者ノ
字皆助字ニテ意多シ古ハ今トイフ意ニアラズ此類
猶多シ○也ノ字ハナリト讀ムト常シ檀弓ニ焉然也妻者
者是焉白也母不焉仍也妻者是不焉白也母トアル此也○字
如然レドモ人名ノ下ニ也ノ字ヲ附ルハ古文ニ其例多クハコレ

ハ猶怪クニ足ラズトイフヘシモ詩ニ俾ニ可忘トイヒ匪直也人秉
心塞淵トイヘル此等ノ也ノ字如何讀ニヤ莊子ニ胡蝶胥也化而
為夷トアル此也字何ノ意多クヤ只衍文ト見ユ然トモ是衍
文ニアラズ古書ニ此類多シ○矣ノ字古來俾訓トシ只句末ニ
在テ語ノ絶ル處ニコレヲ置クコト常也然ルヲ論語巧言令
色鮮矣仁トイヘル矣ノ字句中ニ在テ語ノ絶ル詞ニアラズ
○焉ノ字ハ或ハコレト讀ニ或ハコト讀カク多シ又或ハ句中ニ
在リ或ハ末ニ在テ矣ノ字也ノ字ノ如ク何ノ意多クモ且ク用タ
ル處アリ礼記ニ故ニ先王焉焉為之立中制節トアリ莊子ニ
右ニ數存焉於其間トアル衍字ノ如シ楚辭ニ馳椒丘且
焉止息乃遂焉而逢殃トアル此等ノ焉ノ字皆常例ニ非

○哉ノ字ハ歎スル詞ニテカト讀ミ疑フ詞ニテヤト讀ムコト常ニ
然ルヲ莊子ニ世雖貴之哉トイヒ國語ニ余雖醜然而人面哉
ト云ヒ楊子雲ガ解嘲ニ雖其人乏膽智哉トイヘル此等ノ哉
字ハ歎スル詞ニアラズ疑詞ニモアラズ只是助字也俾語ニ如何讀
ヘキヤ古人ノ文拘ハラカルト如此○又云讀法而ノ字則ノ字ハ
皆上ヲ承テ下ヘ送ル詞ナリ故ニ而ノ字アレバ上ノ句ヲ云シテ上讀
ム是通達ノ事ナリ或ハ而ノ字上ニテトイヒカタキ處アリ拘泥スベ
カラズ古文ニ至テハ殊ニ尤拘リカタシ而ノ字ヲ用ヘキ處ニ則ノ字
ヲ用ヒ則ノ字ヲ置ヘキ處ニ而ノ字ヲ置類ノコト多シ何ゾ常ノ
字ナキニ拘ルベシマ○然ノ字ト而ノ字ト其義相通ス而字ニ然
字ノ如クナル處アリ然字ニ而ノ字ノ如クナル處アリ此兩字ニ方

シテト讀ム處アリシカレトモト讀ム處アリシカルニト讀ム處アリ是
亦一定セズ○而ノ字ト以ノ字ト對シテ用ルコトアリ楚詞ニ是多シ
二字異義ナシ以テ而ニ換而ヲ以ニ換テモ其義皆通ズ○而ノ字
ヲ之ノ字ノ意ニ用ルコトアリ左傳ニ有威而可畏謂之威有儀而
可象謂之儀トアルヲ威アリテ畏ルヘキコレヲ威トイフ儀アリテ
象ルヘキコレヲ儀トイフト讀ム此二可ノ而ノ字ハ之ノ字ノ意
ナリ威ノ畏ルヘキ者アルヲ威トイヒ儀ノ象ルヘキ者アルヲ儀
トイフトイフ意ナリ古書ノ中ニ此例多シ知ラズハアルヘカラス
一春日祭ニ振鉞細胃ニテと云々ニテあり振舞三節トテ東西ノ儀
屋ヨリ出テ舞之方歳樂延喜樂賀殿地久臨時祈願ホ
有之候節ハ舞樂此間ニ相加へ舞フ近年正徳二壬辰年央宮ヨウキウ

樂敷千石之○細胃ロイナウ六人神樂舞奏之立烏帽子白張
て節と云々一人覆面と云々儀と鼓と竹片と云々打子
了と云々記し居る退る老ん又二人つとんと云々れちの
神と掩く主守り主おゆると退く二三及如此右春日脚
祭礼圖より云々

一虎子ハコ小便ヲシコム器也此方ニテオカト云物又ニルトモ云物ニ
同漫録ニ記ス字彙ニ云虎子ハコ澁器西京雜記ニ李廣射獵
冥山定北見伏虎射之以其頭為澁器今鑄銅象之亦服
猛也

一毎乃ノ二字寧ノ一字ハシロトヨミ来レリ貞丈云ハシロト云フ詞儒
書ヲ讀ム詞ニテ外ノ傳詞ニ通用セ又詞也ハシロトヨムハ惡シナシ乃何

何トヨムヘシ寧ノ字ムシロトヨムヲ末ニ記

一 喪服ニ五等アリ斬衰ザンサイ齊衰サイサイ大功小功總麻ナリ是ヲ五服トイフ
斬衰ハ三年存衰ハ二年大功ハ九箇月小功ハ五箇月總麻ハ三
箇月也三年ハ再期也死タル月ヨリ二十五箇月ナリ期ハ十二箇
月一周スルヲ期トイフ三年トイヘトモ實ハ二年也存衰ヲ期ノ
喪ト云死タル月ヨリ十二箇月一周シテ明年ノ其月ニテタイ
フ實ハ十三箇月ナリ存衰ニ杖ツクト杖ワカガルト五月ト三月
ト凡テ四等アリ杖ツクヲ杖期ト云杖ワカガレテ不杖期ト云杖ツ
クハ重ク杖ツカサルハ輕シ五月三月ハ又不杖期ヨリモ輕シ服ハ衣服
ナリキモノ也喪ニハ常ノ衣服冠履ヲ脱テ五等ヲレクノ服ヲ着
故ニ是ヲ服トイフ服ノ制其差五等アリ五服皆麻布ニテ作ル麻

布ニ麻細アリ八十縷ヲ一升トストス升ヲバ此方ノコトヲ紅女ノ詞ニヨリ
トイフ是ナリ斬衰ハ三升ノ布ヲ用フ存衰ハ四升五升六升大
功ニ七升八升九升小功ハ十升十一升十二升總麻ハ十五升ヲ用テ
其年ヲ去ル斬ハ裁割ノ義ナリ裁割レテ緝セサルハシヌヒナ
リタチメヲミツフコト是ヲ斬トイフ痛甚キトイフ義ヲ取レハ衰
ハ推ナリクタルコト孝子ノ心推裂スルコトヲ表スルコト衰トイフ
衰ハ衣ナリ下ヲ裳トイフ衣裳皆極テ廉キ生麻布ヲ用フ衣ノ兩
旁下際皆緝セズ背ニ負版アリ布ヲ方八寸ニ裁テ領ノ下ニ綴ル悲
衰ヲ負荷スルトイフ義ナリ前ニ衰アリ布ヲ長六寸廣サ四寸ニ裁
テ當心ノ處ニ綴ル孝子哀推ノ心アルコトヲ明スナリ首ニ冠アリ
首經アリ首經ハ麻ノハ午ニキナリ腰ニ腰經アリ腰經

ハ麻ノコシニキシ絞帯ハシビナリ足ニ履アリ父ノ身ニ苴杖ト
テ竹ノ杖ヲツク苴ハ藜黒色ナリ紫竹ノ類ニ母ノ身ニ桐杖ト
存衰ハ次ニ麻キ生麻布ヲ用フ齊ハ絹ナリ衣ノ西堂
下際ヲ絹スル故ニ存衰トイフ餘ノ斬衰ニ同シ冠履
經帶ハ存衰以下各異也大切ハ稍麻キ生布ヲ用フ小切稍
細キ麻布ヲ用フ切ハ今此方ノ俗ニ細ユトイフ意ニ布ノ
細ニ麻大ナル故ニ大切トイヒ布ノ細ユ細小ナル故ニ小切
ト云フ服制ハ齊衰ト同シ大切以下ハ負版トシ總麻ハ
極テ細キ熟布ヲ用フ練タル布ナリ總ハ練ト同シ細
キコト練ノ如クナルヲ以テ總麻トイフ服制ハ存衰ト
同シ又婦人ノ裘服ハ男子ト異ナリ凡五服ノ制ハ礼經

ニヨクヤウ

ニ出テ其說後世ノ書ニ詳シ今近クハ文公家礼存家室
要等ノ書ヲ考テ知ベシ

一凡喪服ニ正服アリ義服アリ加服アリ降服アリ正服
ト云フハ骨肉ノ分アリ親戚ノ屬アリ恩愛ノ情アリテ
コレガ爲ニ服スルヲ正服トイフ父母ノ喪ハ云ニ不及伯又
叔父兄弟ノ爲ニ存衰斯年スルガ如キ是正服ナリ
弟服ト云ハ骨肉ノ分モナク親戚ノ屬モナケレハ恩愛ノ
情アルニヨリテ義ヲ以テ服スルニ伯母叔母ノ爲ニ存衰斯年
シ兄弟ノ妻ノ爲ニ小切ヲ服スルカ如キ是又婦人夫ノ
爲ニ服シ夫ノ父母諸親ノ爲ニ服スルガ如キ皆是義
服ナリ加服ト云フハ加ヘテ重クスル也嫡孫祖又母ノ

為三重キヲ兼レバ斬衰ヲ服スルガ如キ是レ重キヲ兼ル
トハ嫡子其父ニ先タテテ死シ嫡孫其祖父ノ継嗣トナ
ルヲ兼重ト云降服ト云ハ降シテ輕クスルニ凡男子ノ
人ノ後トナリテ其本生ノ親族ノ為ニ服シ女子出嫁
シテ其私親ノ為ニ服スルニ皆一等ヲ降スル私親トハ本
宗ノ親族ヲ云フ此方ノ俗ニ野方ノ親類ト云者ナリ一
等ヲ降スルハ正服斬衰トハ降服弁衰不杖期ニ正
服弁衰不杖期トハ降服大功ナリ大功ハ小功ニ降シ小
功ハ總麻ニ降シ總麻ハ苧服ニ降ス又祖免音ト云コトア
リ祖ハ上服ヲ祖カスグナリ免ハ寸ノ布ヲ以テ髮ヲ括ルニ五世
ノ祖ノ屬アル者ハ五服ノ外ナル故ニ總麻ヲモ服セズ其

喪ニ遇ヒ若ハ葬ニ會スルニハ只祖免スルニ又彼我カ為ニ
服スレバ我モ亦彼ガ為ニ服スルヲ報服トイフ彼我ガ
為ニ降服スレバ我カ報服モ亦降スル右兩条親族正名
ニ見

- 一 親死シテ十三月ヲ小祥ト云一周忌ニ二十五日ヲ大祥ト云三年忌也
- 一 忌日礼記ノ祭儀云君子有終身之憂忌日之謂也注忌日親亡之日也
- 一 成語考曰百日内ヲ曰泣血百日外曰稽顙期年曰小祥而斯曰大祥
- 一 親門正統曰若百日與大小祥之類皆託儒禮修不出

世ヲ法耳 真俗仙史編見 沙川子登所著 出世ノ法トハ世俗ノ法ヲ云出家ヲ

世ヲ捨去ル故世更ニ拘ルヲ出世ト云ナリ

一死ノ翌日ヲ小歛ト云 三日ヲ大歛ト云葬ルニゲ人間ヲ

殯ト云人ノ喪ノ中ヲ制中ト云制生ハ喪アル人ノ自称也

一菅丞相ノ事本朝俗訛正誤云菅丞相流罪ハ延喜元

年也同三年ニ薨セラレ又雷清涼殿ニ落シハ延長八年

其間二十八年也忠臣何カ君ヲ恨ニ是一ツ何ソ二十八年ヲ待

ニ是ニツ時平ニ徒黨シテ咒咀セシ僧ト源ノ光ハ藤原定

國ナドノ讒臣花ニ時平コフ最前ニ死シタレバ其子共ヲ

ツカニ殺スベキニ思モヨラス平ノ希世在原遠瞻燒殺サ

ル是ニツ其後朱雀義平ニ東大延曆雷火ス是亦菅兼

相ノ靈也ト云皆偽也奇妙ヲ云トヲ賢人ヲ惡クシナスノ淺

一シキ

一右京進ホト云鞍ノ事諸家深秘録云淺倉右京進ト申ス

人ハ元來相品小田原北条家の侍成リガ數年ノ軍切故ニ

小田原没後 御當家ハ長カニ右京進ト下され後水尾殿ハ

付ラリ 中略 元來右京進ハ無類の細工人ト云 鞍ホの工子

ト云右京進ホト云作の鞍同希ニ用ヤム後嫡子勘解

由紀作ホト云細工今鞍の曲人ト云ホト云平尾東城ト

ト云細工人紀長ト云ト云ト云是ハ勘ケ田の農人ト習ヤム也

兼及平の淺倉或ハ勘倉ト云 一平の内直也 手て也

一伊達氏流の事云寛永三年ニ 台徳院攝河上法

トキ伊達政宗の借後等ハシキ衣類と云フケシハ流
玉の人民ノ登り加との比流の人と云フハ伊達と
云々其時政宗ノ行粧美濃ヲ尽シ直紅ノ糸ヲ以テ馬
當ヲ作レリト是ニテ其外モ押シテ知レバ腐鏡見

一慶安と云フ武列江戸本境所ニ大和慶安と云フ醫師あり
者ガ又同所又伊達之部も出在谷川柳堂と云フ人ハ
其の妻ノ妻也一入魂ノと云フ世名ノ今ノ出入或ハ行松公
ノ所ハ甲女婚姻の媒的等石之人ト云フ所入也其の
江戸と云フ所ハ長門守忠貞ト稱シ一万石ノ所ハ海軍
兵部卿の所也位と或時かの其安也門守の息女と或方何
某ハ縁辺也然レモ一入と云フ所ハ其の妻也其の妻ハ
彼之人の妻也其の妻ハ一入也其の妻ハ其の妻也其の妻ハ

一此のくせと云フ所ハ其の妻也其の妻ハ其の妻也其の妻ハ
寛文五年乙酉八月廿九日在官右の縁取双方伊達政宗の三人の
女と伊達政宗の女と云フ所ハ其の妻也其の妻ハ其の妻也
者ト云フ所ハ其の妻也其の妻ハ其の妻也其の妻ハ其の妻也
一此のくせと云フ所ハ其の妻也其の妻ハ其の妻也其の妻ハ
弱らるる也其の妻ハ其の妻也其の妻ハ其の妻也其の妻ハ
間遠くハ其の妻也其の妻ハ其の妻也其の妻ハ其の妻也其の妻ハ
又徳也其の妻ハ其の妻也其の妻ハ其の妻也其の妻ハ其の妻也
習フハ其の妻ハ其の妻也其の妻ハ其の妻也其の妻ハ其の妻也
貫草ノ射也其の妻ハ其の妻也其の妻ハ其の妻也其の妻ハ其の妻也
射法ノ衰タルヤ其の妻ハ其の妻也其の妻ハ其の妻也其の妻ハ其の妻也

一五斗味噌ノ方 米ノヌカ五斗 大豆壹斗 米ノ糠三升
塩五升 右ツキ合セ 三十日過テ用ベシ 一名ヌカミツ氏云軍
中ニ多クシヨシ置ヘシ

一可笑記云作者不知 昔某タメシノ鎧ソオドシ候ハシトテ注
文ヲ伺リ親ニ見セ候ハ親ノ申サレ候ハタメシノ鎧ハ
重キ物ニテ汝ガヤウナル小男ノ用ニハ立カメシ侍人諸道
具ハ其身々々ニ相應シテ取ハシ自由ナルガヨシ汝ガ母
方ノ祖父東禪寺右馬頭常ニ被申シハ運ハ天ニアリ
鎧ハ胸ニアリトテ幾度ノ合戦ニモアカ子細ノ羽織
ホキテ人ノ先ヲカケシニガリサセウレケレ氏一代カスキヲ
モオハス

一北越大平記云全二十五冊作者治東隱士雲庵 諸書ヲ引上杉輝虎景勝事跡ヲ記 信凡川中島合戦

ハ五箇度也是ヲ世ニ五箇度ヲ一箇度ニ混雜シテ沙汰ス
○又云上杉家ニ車返ト云行ハノク様ニモテナシ先ヨリクル

リト引ハス也貞丈云車カヘシヲ覺屋 甲陽軍鑑ニ車カウト云

一猿樂ハ敬樂也本朝文粹卷三村上天皇御製敬樂ノ文アリ 明徳往來注云 敬樂猿樂ナリ 三代実録ニ内藏富继長尾米继伎

善敬樂令人大笑○江家次第標注云敬樂猿樂也○源
氏物語物多クナドニテウケト云

一九字 抱朴子云入山宜知六甲秘祝祝曰臨兵闘者皆陣列

前行凡九字常密祝之各所不避要道不煩此之謂也
○居家必用云門 先畫四縦後畫五横是九字也

一車のうものり拾遺集雜下云能宣子車のかもと。こひん

わししゆりけふ。ゆりまもいしゆりそれし名中仲文
かよひてると人あつたれまかよひしゆりまもいしゆり
し。ゆり。まもいしゆりまもいしゆりまもいしゆり

もよへるまもいしゆりまもいしゆりまもいしゆり
ルナリ 蘇カモトヨム
モムシロナリ

一 堀和氏 室所殿時代けし人アリ今ハ榊原ノ家ニアリト
云

一 男子齒ヲ淺クするものゆりしゆりしゆり
海人藤芥のゆり

記ノゆり 俗説録 作者不知ト云
書ノ校書ニアリ

一名 甲ノ事 武隠叢話巻八云 細川三齋ニ奉公セシ老人
浪人京ニ在シガ其物語ニ攝列テ谷ニ谷ト並テ峙ツテ

谷ノ峠ヲ鉄蓋カ峯ト云。美濃 菩提城主竹中半兵衛重
次カ曾ハ「谷ト云。明智左馬助秀俊カ曾ハ「谷ト云。但一ノ谷
ノ曾ニ押並タル名物也ト云。一ニ依テ「谷ト云。柴田伊賀守
勝豊カ曾ハ鉄蓋カ峯ト云。是ハ「谷ヨリ午上也ト云。一ノ惣
ニテ名物ノ曾ハ。浦野若狭守カ水牛。黒田長政ノ大水牛。
日根野織部ガ唐冠。原隠岐守カ十五頭。福島正則ノ四肢鹿
角。本多中書ノ忠信ノ曾 佐藤忠信ノ曾也 秀吉ヨリ賜ハル 蒲生氏郷ノ鯨尾 休木
久内ガワリ蛤 細川三齋ノ山鳥 竹中半兵衛ガ「谷。明智左
馬助ガ「谷 柴田伊賀守ガ鉄蓋カ峯。矢田作十郎ガ鯉曾
武田信玄ノ諏訪法性。秀吉公ノ八月。台徳院殿ノ御召角
頭巾ノ御曾。是ハ隠十キ名物也。加藤清正ノ長鳥帽子藤堂

新七か帽子。ナドモ世ニ名高キ曾ナリ。○
本書ニ甲ノ字ヲ用非也
今曾ノ字ニ改ム

一同書同卷云津田長門守入道道慶物語ニ云日根野織部
か唐冠ノ甲ノ立物鐘馗耳二尺五寸服立也但右ノ耳ノ立物ハ半
分ヨリ折レカ、リタル様ニスルニ太刀ヲニ構_フ故也

